古田城跡

——茅野市立八ヶ岳総合博物館用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1987

茅野市教育委員会

目　次

序
例　　言
発掘関係者名簿
Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査に至るまでの経過……2
Ⅲ　調査の方法と経過……2
Ⅳ　遺跡の層序……4
Ⅴ　遺構と遺物……4
　A　遺構……4
　B　遺物……9
Ⅵ　ま　と　め……10
Ⅶ　結　　語……13

図版目次

第1図　遺跡位置図（1/50,000）……1
第2図　地形と発掘区（1/2,500）……3
第3図　遺構分布図（1/750）……5
第4図　1号土坑（1/30）……6
第5図　2号土坑（1/30）……7
第6図　3号土坑（1/30）……8
第7図　ナイフ形石器（2/3）……9

芽野市立八ヶ岳総合博物館用地全景（空撮）

序

今回の古田城跡の発掘は、茅野市立八ケ岳総合博物館の建設に伴い、茅野市教育委員会が実施したものである。

八ケ岳西麓は、国の特別史跡である尖石遺跡をはじめ、縄文時代中期の貴重な遺跡が数多く分布することで知られている。それらは往時の人々が生活を営んだ集落遺跡であるが、今回調査した古田城跡は、獣などを捕る狩猟地とみられる遺跡であった。かつて茅野市では、北山蓼科の城ノ平遺跡で同様の遺構が調査されたが、今回はそれに次ぐものである。

遺跡というと、住居跡が掘られ、土器や石器が数多く出土するものと思われがちであるが、今回のような遺跡にも、当時の人々の生活の一面を垣間見ることができる。それは人間の食に関する部分であって、人間とは切ってもきれない生活の一部である。こうした当地としては大変珍しい狩猟遺跡の発掘であった。今後この報告書が多くの人々に利用され、考古学研究や文化財保護に役立つことを心から願うものである。

今回の調査では、埋蔵文化財を広く一般に理解していただくために、地元、下古田区の老人クラブに協力をお願いし、作業をお手伝いいただいた。わずかな期間とはいえ、暑い季節の馴れない作業でご苦労が多かったことと思われる。発掘調査に理解を示され、作業に従事された方々に深く感謝申し上げる次第である。

昭和62年１月

茅野市教育委員会

教育長　小島与四男

例　　言

1　本書は、茅野市立八ケ岳総合博物館建設に伴う、遺跡発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、茅野市教育委員会が中心となり、古田城跡調査委員会、古田城跡調査団を組織して行なった。(別掲)

3　発掘調査は、昭和61年8月2日から8月22日まで行ない、報告書は、8月23日から12月27日まで茅野市役所博物館準備室で作成した。

4　発掘現場における記録は、鵜飼幸雄と小林深志が行なった。遺構写真は、小林が担当した。本書の作成は、遺物については図版・原稿とも守矢昌文が行ない、その他を小林が担当した。

発掘調査関係者名簿（敬称略）

1　古田城跡調査委員会

委員長　東城喜良（教育委員長）

副委員長　小川昇一（教育委員長職務代理）

委　　員　今井利弥(教育委員)、今井千活(教育委員)、山本秋男(社会文教委員長)、矢崎孟伯(文化財審議会委員長)、小島与四男（教育長)、宮坂和茂(社会教育課長)、五味　孝（耕地林務課長)、五味　清（財政課長）

会計監事　五味　清

2　古田城跡調査団

調査団長　矢崎孟伯（文化財審議会委員長）

副調査団長　竹村美幸（文化財審議会委員）

調査員　宮坂武男（岡谷市立神明小学校教頭)、鵜飼幸雄（茅野市教育委員会学芸員・日本考古学協会員)、守矢昌文（茅野市尖石考古館学芸員)、小林深志（茅野市教育委員会学芸員）

発掘協力者　永田淳美、長田初市、長田綾子、長田たなえ、長田あいし、樋川まつ子、長田きよみ、長田よし子、永田　節、長田邦寿、長田義治、市川正夫、牛山市弥、市川千ふみ、赤羽すわ、岩下百合子

3　事務局

事務局長　小島与四男（教育長）

事務局次長　宮坂和茂（社会教育課長）

事務局係長　伊藤修平（文化財係長)、岩波吉春（社会教育係長）

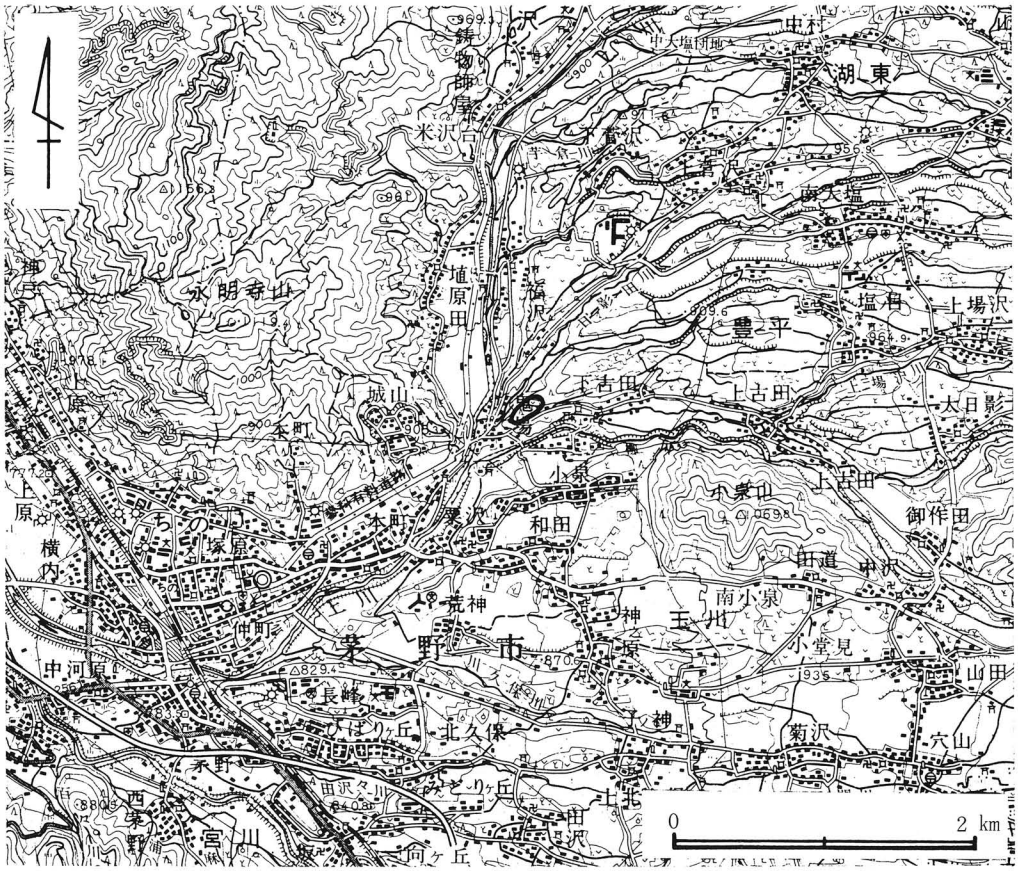
局　　員　柳沢士郎、池田文子（社会教育係）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

八ケ岳連峰西麓の広い裾野を、いく筋にもなって流れ出た清流は、霧ケ峰山地に続く永明寺山麓と、小泉山西麓から西へ延びる舌状台地に挟まれた幅２km程の地域で上川と合流し、下流に下って西山山麓から流れ出した宮川と平行して北上し諏訪湖に至る。この上川に合流する地域、鬼場橋周辺は、豊平・米沢・玉川・茅野の各地区が接し、古来より山浦の各地区へ通ずる交通の要地でもある。

その上川に合流する支流に日影田川と柳川があるが、この２つの川に挟まれた丘陵の先端が通称「寺山」で、茅野市立八ケ岳総合博物館の建設予定地である。

この「寺山」の地は、かつての豪族古田氏の城跡があったとの伝承があるが、ここから上川を挟んで西方約300mには鬼場城跡があり、また柳川を挟んで南方約1,000mにも粟沢城跡がある。このことからも、この鬼場橋周辺の地がいかに重要な位置を占めていたかが理解される。



第１図　遺跡位置図（1/50,000）

II　調査に至るまでの経過

茅野市では、市民の文化に対する関心と生涯教育についての意識が高まるなかで、種々の社会教育施設の建設・整備を進めてきた。博物館施設も当市は既に尖石考古館・民俗資料館の２館を有し、それぞれ独自の活動を行ない多くの成果をあげてきたが、民俗資料館は旧校舎の利用であり、また尖石考古館は市街地からかなりの距離をもっているなど、一般市民が日常の博物館活動を行なう上で不便なものとなっている。そこでこれら人文科学系ばかりでなく自然科学系をも含めた総合博物館を市街地周辺に建設することとなった。そして、いくつかの候補地の中から、さまざまな条件を考慮の上、豊平下古田の地を選定した。

当地は、古田氏の城跡との伝承があり、長野県による中世城館跡分布調査にも登録されている所から、事前に発掘調査を行なうこととなった。

調査を行なうにあたり、諏訪地方の城館跡に詳しい宮坂武男先生、竹村美幸両先生とともに社会教育課員一同で現地調査を行なったが、地表面の観察からは土塁あるいは空堀といった遺構の存在は確認できなかった。また、造成に伴う抜根で表土が一部掘り返されていたが、そこを歩いてみても遺物はまったく採集できなかった。以上の他、この地が平坦面だけでも7,100㎡程の面積を有し、古田氏という一小豪族が城または館を維持し守るには規模が大きすぎるのではないかとの指摘も受けた。

さまざまな点で当地に城館跡の遺構がある可能性は少ないと思われたが、後世に何らかの手が加えられ、土塁・空堀が確認できなくなったとも考えられるので、教育委員会では、念のため建造物が構築された可能性のある平坦面を中心にトレンチによる発掘調査を行ない、何らかの遺構が確認されしだいその周辺を拡張して調査する方法をとることとした。

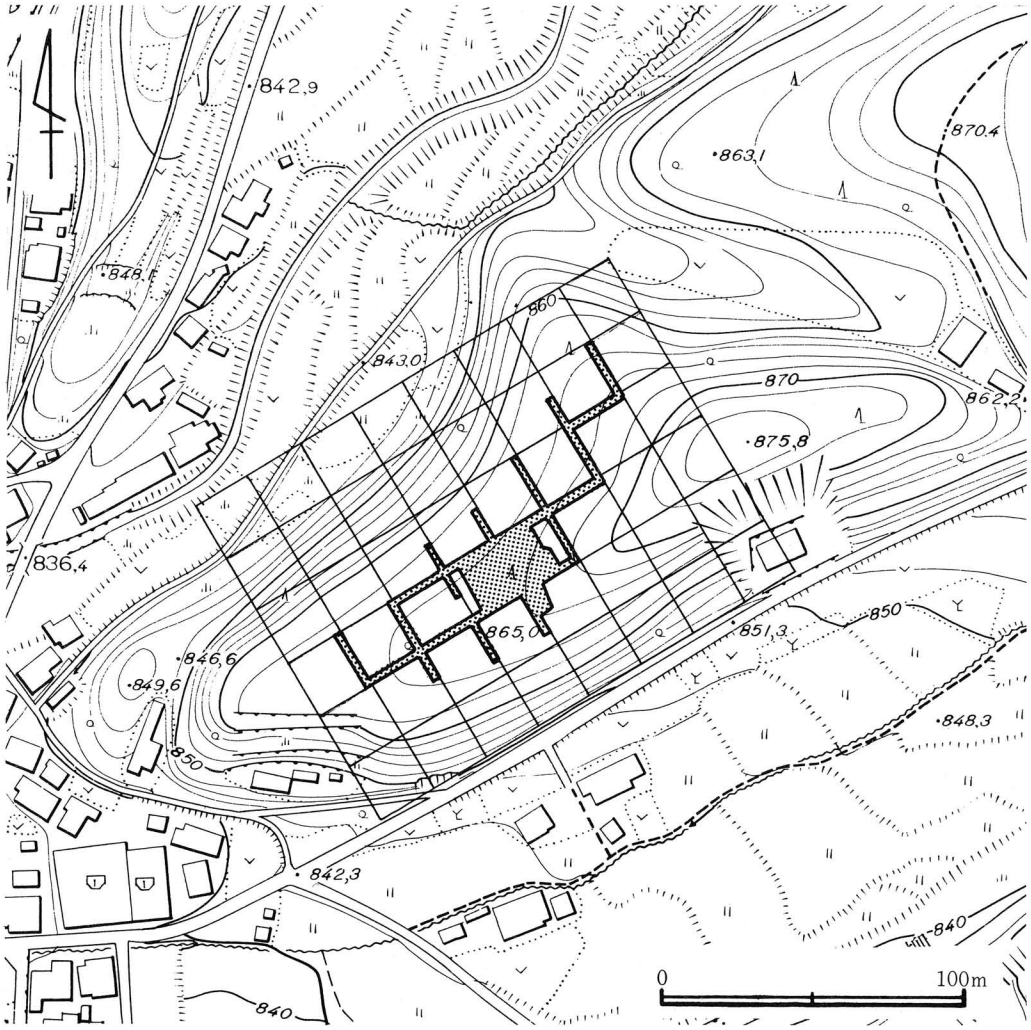
III　調査の方法と経過

博物館用地内には、造成工事のための測量用の杭が、地形にそって20mおきに枡目状に打たれていたため、この杭を利用して２m幅のトレンチを井桁状に掘っていくことにした。なお、杭の軸線は、南北軸がN－30°－Wを指す。

調査は、８月２日から行なわれた。トレンチ掘りは、調査員が重機の横につき、上層の黒色土を遺物に注意しながらローム漸移層（ぜんいそう）の直上まで薄く剥いでいき、残りを人力で精査する方法をとった。精査は５・６日の両日に行なわれたが、調査前に地表面の観察を行なった際に確認したとおり、土塁や空堀などの遺構は検出されず、遺物も城館跡とは時期的に関係のない黒曜石の石器が１点表土層から出土したにとどまった。同時に土層の観察も行なったが、黒色の表土の下は、直ちにローム漸移層・ローム層と続き、土層の断面からは各々の時代の生活面や遺物包含層（いぶつほうがんそう）を確

認することはできなかった。しかし、平坦面のほぼ中央に柱痕かと思われる遺構を１ケ所確認したので、８月12日、古田城跡調査団会議を現地で開き、今後の調査方法について検討した。その結果、検出された遺構が柱痕であるとした場合に建物のどの部位の柱痕であってもよい面積を重機で拡張した後、精査することとした。重機による拡張は、８月18・19日の両日に行ない、翌20日には人力による精査・遺構確認を行なった。遺構確認の結果、当初に検出された柱痕と思われた遺構は、建物跡にはならず、縄文時代の「陥(おと)し穴」と考えられる土坑(どこう)になり、計３ケ所検出された。８月21日には検出した遺構を掘り上げ、翌22日に実測・写真撮影を行ない調査を終了した。

トレンチによる調査は延341m、平坦面の約10％にあたる682㎡を行なった。また、その後拡張した468㎡を含めた調査総面積は約16％にあたる1,150㎡であった。



第２図　地形と発掘区（1/2,500）

Ⅳ　遺跡の層序

調査の方法と経過の項でも簡単に触れたが、本遺跡の層序は、平坦面に限っていえば、層厚に多少の違いはあるもののほぼ均一で、単純である。

表土層は、西の丘陵先端部で約50cm、東の谷に近い部分で約85cmを測る。色調は黒色で、粒子は細かいものの粘性に乏しく、吸水性に富む。

表土の下は、ローム漸移層が続くが、この地域としては比較的厚く、15cmから50cmの堆積を示すところがある。色調は、暗褐色を呈する。粒子は細かく、粘性に富んでいる。本遺跡で検出された遺構は、すべてローム漸移層の上面で確認されている。また、通常遺跡を発掘すると、表土層とローム漸移層の間に、考古学の史料である遺物を出土する遺物包含層が存在するが、本遺跡では遺物包含層は確認できなかった。

Ⅴ　遺構と遺物

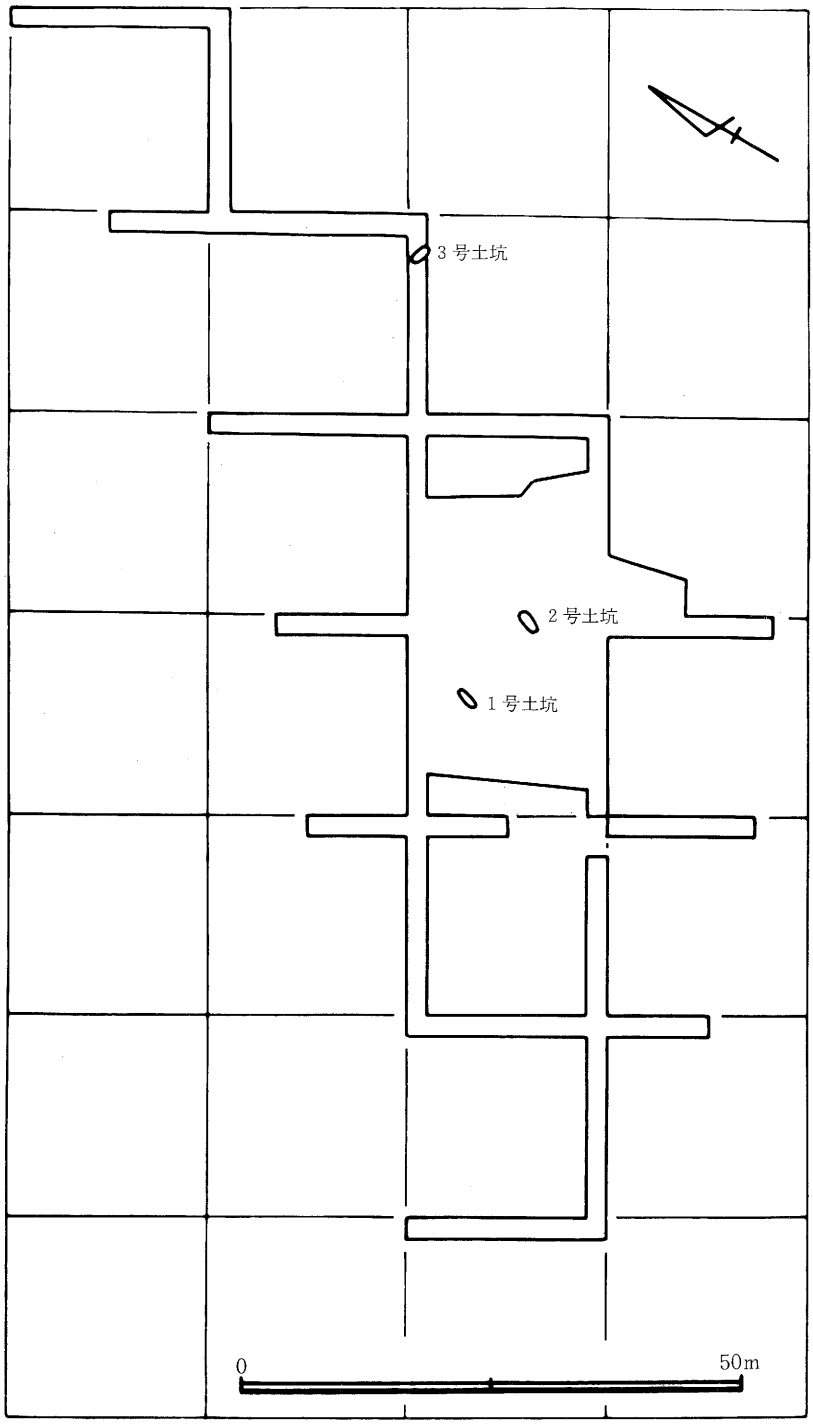
A　遺構

1号土坑（第4図）

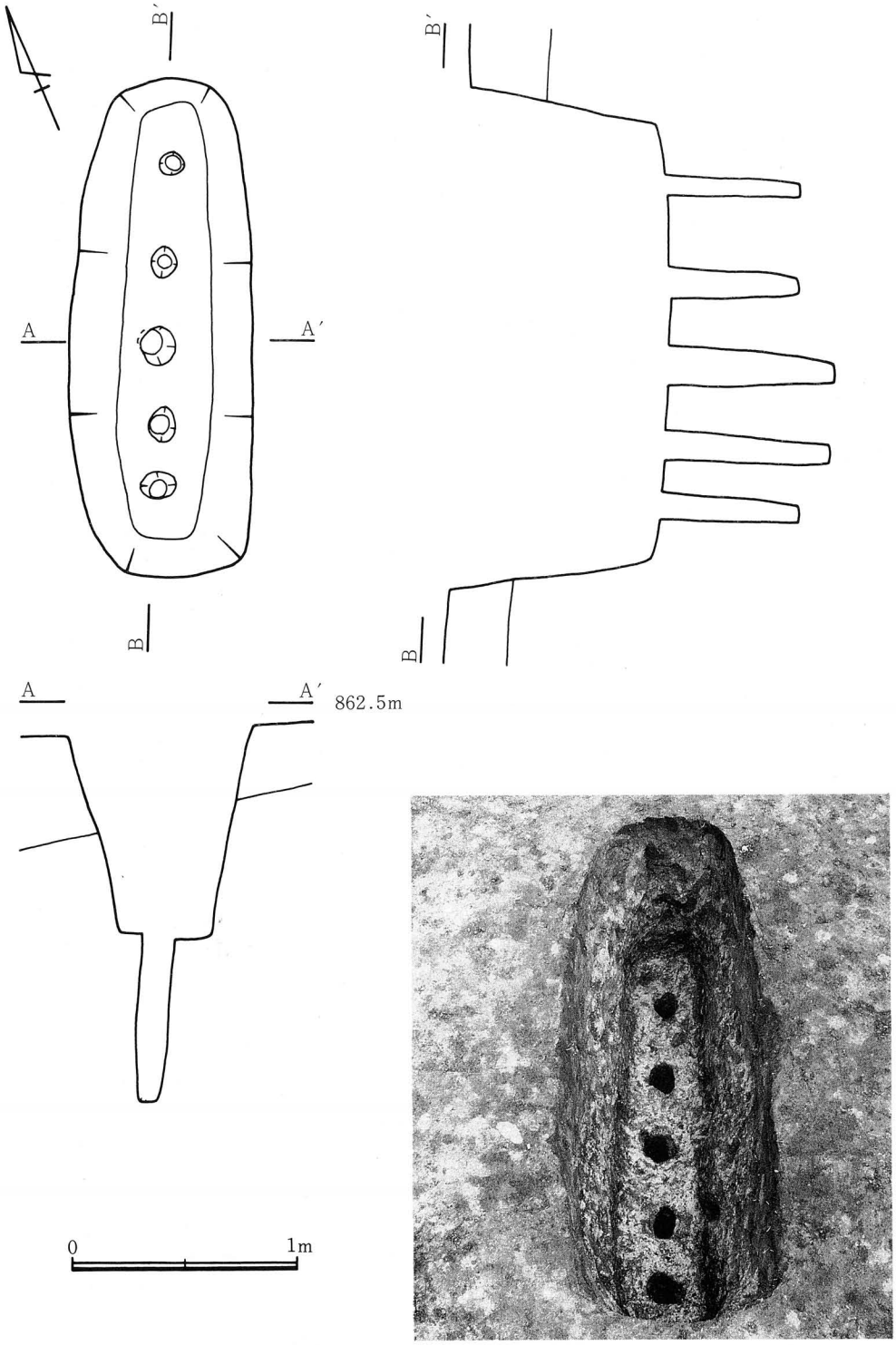
遺構の確認は、黒色土排除後、ローム漸移層上面で行なわれた。平面形は隅丸長方形で、長径2.22m、短径0.80mを測る。底面形も隅丸長方形で、長径1.94m、短径0.40mを測る。壁は、短軸断面によると底面から直立した後やや外方に広がる「Y」字形を呈する。壁高は、最も深い箇所で0.96mであった。底面には、長軸方向にほぼ等間隔に径0.10～0.18m、深さ0.56～0.74mの小ピットを5個持つ。遺構覆土は黒色土で、粒子が細かくよく締っている土質で、本遺跡ではローム漸移層の上層に堆積している土層である。また、小ピット内の覆土は暗褐色土で、ローム粒子を多く含むボソボソの土質であった。

2号土坑（第5図）

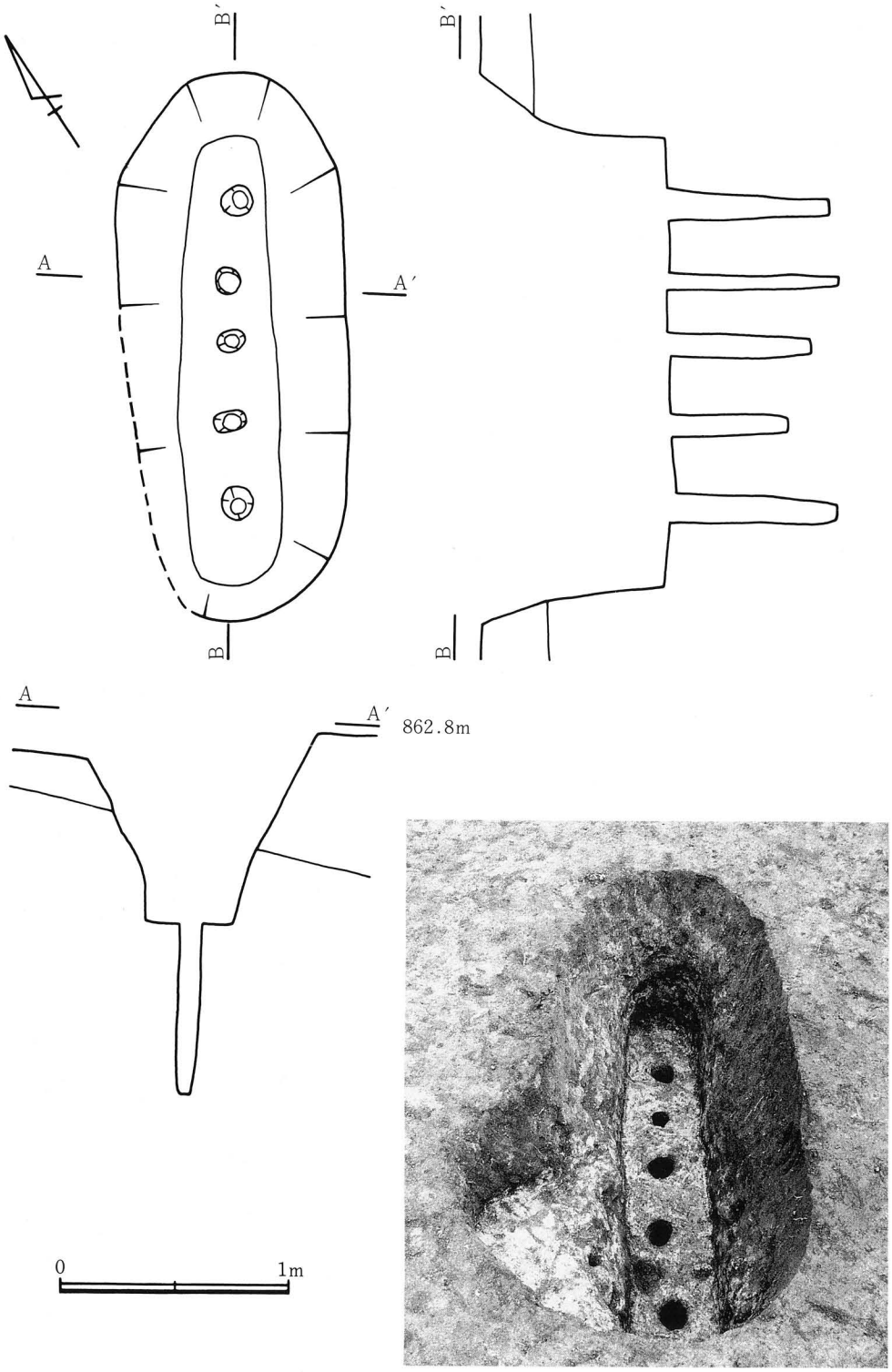
本跡は、遺構確認のためのトレンチで、黒色土排除後ローム漸移層上面で検出された。最初古田城に関連する柱穴ではないかと思われたが、拡張する事により土坑であることが判明した。平面プラン検出の際、南西部に張り出し部が見られたため、土坑が重複しているのではないかと思われたが、掘り進めてみると、南西部は20cm程の浅い落ち込みとなってしまった。また、覆土からは土坑内と張り出し部に堆積した土層の区別がつかないため、同時期に埋没していったと思われるが、元の形態がこの様になっていたのではなく、1号土坑と同様な土坑の壁の一部が、何らかの理由で崩れ落ちたものであると思われる。平面形は隅丸長方形で、長径2.44m、短径1.00mを測る。底面形も隅丸長方形で、長径1.70m、短径0.38mを測る。壁は、短軸断面によると底面



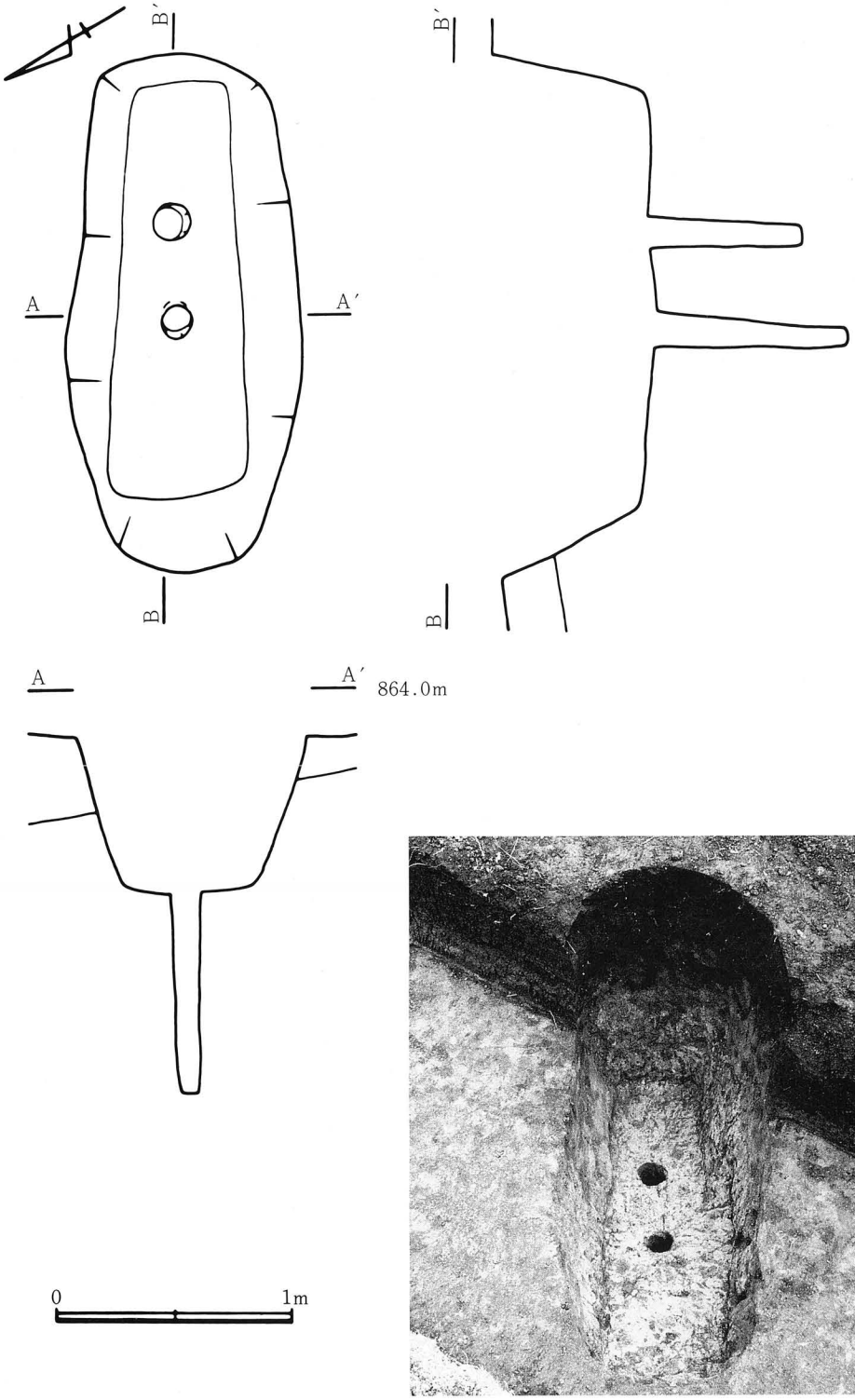
第 3 図　遺構分布図（1/750）



第４図　１号土坑（1/30）



第5図　2号土坑（1/30）



第6図　3号土坑（1/30）

から直立した後やや外方に広がる「Y」字形を呈する。壁高は、最も深い箇所で0.87mであった。底面には、長軸方向にほぼ等間隔に径0.10～0.15m、深さ0.53～0.78mの小ピットを5個持つ。遺構覆土は1号土坑と同じ黒色土で、粒子は細かくよく締っている。また、小ピット内の覆土は暗褐色土で、ローム粒子を多く含むボソボソの土質であった。

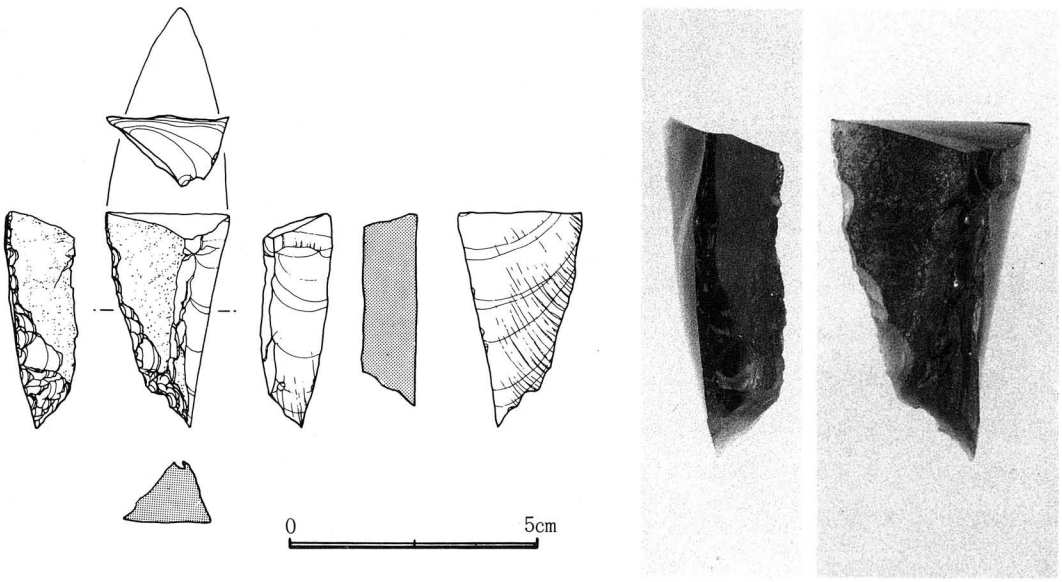
3号土坑（第6図）

遺構の確認は、56cm程の表土を排除後、ローム漸移層上面で行なわれた。平面形は隅丸長方形で、長径2.22m、短径1.00mを測る。底面形も隅丸長方形で、長径1.79m、短径0.56mを測る。壁高は、最も深い所で0.67mを測る。底面には、長軸方向に2個の小ピットを持つ。小ピットは、北側のものが径0.12m、深さ0.83m、南側のものが径0.16m、深さ0.67mである。遺構内の覆土は、1・2号土坑が黒色土であったのに対し、暗褐色土で、ローム漸移層と黒色土が混じり合った土層を示した。また、小ピットの覆土も暗褐色土であったが、土坑内の覆土に比して締りがなく、ボソボソであった。

B　遺物

ナイフ形石器（第7図）

和田峠産と思われる透明度の高い上質な黒曜石を用いている。素材剝片（はくへん）は一部に自然面を残す厚味のある縦長状剝片を利用している。この剝片は側縁が截断面状となり、割合鈍角である。裏面には主要剝離面を残す。先端部分に打点があったと思われるが、約2分の1を欠損するためにその状況は把握できない。現存するのは基部（きぶ）のみで全体形を窺（うかが）うことはむずかしいが、基部等の



第7図　ナイフ形石器（2/3 写真は 1/1）

状況より平面観が柳葉形(刺突形)を呈するものであろう。基部調整は基部両側縁に行なわれているのではなく、一方は素材剥片の截断面状の部分を生かしている。ブランティングは主要剥離面一方向から行なわれている。

このような形態のナイフ形石器は渋川遺跡第1・第3地点より出土しているが、本資料とは素材が異なるチャート・硅質粘板岩等を用いている。本資料の所属時期であるが、単独出土で石器組成、出土層位も明確ではないために不明であるが、渋川期[註1]位に比定されるものではなかろうか。

近年の発掘調査により山麓部において数多くの先土器時代の遺跡が発見されている。遺跡の分布は柳川以南の原村方面に多くみられ、北側の豊平・湖東方面には発見されていない。このことは、山麓台地の形成と深く関連があるようで、柳川以北の台地にみられる北八ケ岳火砕流等が一つの要因と考えられる。今回資料が検出された古田城跡の台地は高位段[註2]丘面に位置し、付近の台地より比較的安定している。そのため、先土器時代の人々の生活の痕跡が認められたのではないかと考えられる。

渋川遺跡・白樺湖遺跡群等の黒曜石の原産地を背景とした“石器製作址”的な遺跡群と山麓部の遺跡とは性格的に異なり、“生活址”的なものではなかったかと考えられ、それらが、割合安定した台地に散在していることが窺える。今後、柳川以南の高位段丘面の台地より先土器時代の遺跡の発見される可能性が高く、充分に注意していかなければならない。

註

1　斎藤幸恵　1986　「第一章　先土器時代　第五節」『茅野市史　上巻』

2　諏訪教育会　1975　「諏訪地質図」『諏訪の自然誌　地質編』

Ⅵ　ま　と　め

A　古田城跡について

今回の発掘調査は、茅野市立八ケ岳総合博物館の建設予定地が、古田氏の城館跡との伝承があるために行なわれたものである。しかし、本文で述べてきたように、城館跡に関連があると思われる遺構は、本遺跡ではまったく検出されなかった。また、遺物の出土も皆無であったことから、この地に城館跡があったという伝承については、本調査では確認でき得なかった。しかし、この地は鬼場城・粟沢城に対峙しており、一朝有事の際には、古田氏の物見台あるいは狼煙台など、あらゆることに利用されたであろうことは充分考えられる。今回は、調査の範囲を、あらかじめ丘陵先端部の平坦な面に限ったため見逃した可能性もないではない。また、造成工事で既に埋土が行なわれてしまった若干鞍部状となっていた斜面に館跡が存在していたのかもしれない。事前に広範囲の遺構確認調査ができなかったのが悔やまれるところである。

古田城関係参考文献

長野県教育委員会　1983　『長野県の中世城館跡　分布調査報告書』

諏訪史談会　1951　『諏訪史蹟要項　21　茅野市豊平篇』
豊平村史編纂委員会　1966　『豊平村誌』
長野県茅野高等学校地歴クラブ　1979　『(続) 諏訪の山城　史跡踏査報告』　かやの　2号

B　土坑について

遺跡からは、様々な形態の土坑(どこう)が検出される。通常、集落内あるいは隣接したところから発見される土坑は、食物などをしまっておく貯蔵穴であったり、死体を埋葬する土壙墓(どこうぼ)であったりする場合が多い。

本遺跡で検出された3基の土坑は、上記の貯蔵穴・土壙墓といわれるものとは形態・用途の異なるものであると理解される。平面形態・底面形態とも隅丸長方形で、短軸の壁断面が「Y」字形を呈するものであるが、最大の特徴は、底面に長軸方向に数個の小ピットを有することである。小ピットは、径0.10～0.18m、深さ0.53～0.83mで、1・2号土坑が5個、3号土坑が2個有していた。これらの小ピットには杭が入れられたものと考えられており、土坑の用途は「陥(おと)し穴」ではないかといわれている。このような土坑は、茅野市域では北山蓼科の城ノ平遺跡で検出され、すでに杭を入れ陥し穴として用いられたのではないかという考察が宮坂英弐(ふさかず)氏によってなされている。

陥し穴を用いる猟法であるが、追い込み猟と見回り猟の2種が考えられよう。追い込み猟は、数人単位で獣を巻くようにして陥し穴に追い込むもの、見回り猟は、いくつもの陥し穴を獣道に掘っておき、何日かごとに見回るものである。陥し穴の底に杭を立てておいて獣を捕ったというと、杭の先端が尖っていて獣に突き刺さるものを想像するが、必ずしも杭の先端が尖っている必要はなく、足が杭にからまって地表に飛び出さないようになっているだけでもかまわない。特に見回り猟の場合、獣が落ちてからかなり時間が経って発見する可能性もあり、杭が刺さって死ぬようなことがあれば、逆に肉を腐らせてしまうことになる。追い込み猟の場合は、杭の先端が尖っていようといまいとさして問題はないであろう。ただ杭の先端が尖っていたかもしれないという消極的な例として、底の小ピットがやや大きめに掘られ、杭を埋めた後に周囲をかため直した例が発見される。小ピットの中の土を掘ってしまわず、地山ごと半分に割る調査を行なった時など、きれいにその様子が確認できるが、杭の先端が尖っているなどして杭を打ち込むことができないときにはそのような方法が有効であろう。しかし、先端の平らな杭を埋める時にも同様な方法で行なったとも限らないので、決定的な証拠とはいえない。また、土坑の覆土を詳細に観察すると、稀(まれ)に杭の痕跡が上にまで延びている例もある。しかし、杭の方向によっては土層断面に現われる杭の先端の形も変わってしまうので、よほど条件のよいところで杭がそのまま残っていないかぎり決め手とはならないであろう。

各地で発見される陥し穴といわれる土坑を見ると、かなりの数の土坑が検出され、一つの遺跡が土坑だらけという状態になることがある。もちろん同時期に全部の土坑があったのではなく、各時期ごとに数個ずつを単位としていたであろうことが、土坑の形態が数種類あること、土坑同

志で重複する例があることなどによって知られるが、かなりの期間その地域が狩猟の場として利用されていたことが窺える。

本遺跡の例でみると、1・2号土坑が底面に5個の小ピットを有すのに対し、3号土坑は2個であることからも、最低2回(2時期)にわたって狩猟が行なわれたことが推察される。また、これらの土坑は、湧水に近い谷底から斜面にかけて多く分布し、尾根部には比較的少ないことが知られている。本遺跡の調査は、城跡の調査を目的として行なったため、丘陵の平坦部を小範囲調査したにとどまった。したがって、丘陵の先端から鞍部をふくめた谷状の地形までを全面調査すれば、さらに多くの土坑が検出された可能性も指摘できる。

これらの土坑の時期についてであるが、本遺跡ではこの土坑に伴うと考えられる遺物はまったく出土していない。そこで他の地域の例からその時期を推定しておこう。東京都の多摩丘陵では、ニュータウン建設に伴って多くの遺跡の調査が行なわれている。そこではどの遺跡を掘っても多くの土坑が検出され、しかもそのほとんどが本遺跡と同じ「陥し穴」と呼ばれるものである。ここで発見される土坑は、概ね土坑が埋まりきった上に縄文時代前期の遺物包含層(いぶつほうがんそう)が堆積している。また、縄文時代早期前半の撚糸文系(よりいともんけい)の土器を伴う住居跡と重複しているものがあり、それよりも新しいことが知られている。したがって、縄文時代早期後半にその年代を求めてよさそうである。その絶対年代としては、各地の遺跡での放射性炭素(^{14}C)の測定法により、今から7,000年程前という年代が導き出されている。

ところで、茅野市は遺跡数の多いことで知られる。長野県教育委員会で行なった分布調査によると、199ケ所の遺跡が登録されている。しかし、これらは概して集落跡であって、本遺跡のような狩猟を行なった地は、なかなか遺物が発見されにくいこともあって、遺跡として認定されている例は少ない。本遺跡の場合も、当地が城跡ではないかということで調査をしたのであり、縄文時代の遺跡としては登録されていなかった。今後もこのような遺跡は、偶然の機会でもなければ調査されることはないであろうが、このような遺跡を調査していかない限り、当時の人々の生活を解明することは難しいといえる。

一般に、大集落にしろ小集落にしろ、住居跡が発掘され、土器や石器が多く出土すれば注目される傾向にある。しかし、原始・古代の人々もその集落内に閉じこもって生活していたわけではない。今以上に大地を歩きまわり、活動をしていたのである。集落跡だけを調査の対象としていたのでは、充分といえないであろう。本遺跡では、縄文時代の人々の活動の一端を陥し穴の検出という形でみることができた。今後さらにいろいろな活動の場をみつけていくことが、当時の生活を解明していく手段となることを認識しなければならない。

土坑関係参考文献

宮坂英弐　1966　『蓼科』　尖石考古館研究報告叢書　第II冊

東京都埋蔵文化財センター　1982　『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年—』　第1分冊他

長野県教育委員会　1980　『八ケ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』

Ⅶ　結　　語

調査団長　矢崎　孟伯

古田城跡は、中世に古田郷を支配したといわれるこの地の豪族古田氏の城跡であろうという伝承をもっている。中世の軍記物語である「信州大塔軍記」（『信濃史料』8巻399～401P）には応永7年（1,400年）10月の項に、大塔合戦に参加した諏訪勢の有力な豪族として古田駿河守の名がみえ、その他上原・矢崎・大熊氏等も名を連ねている。これらのうち上原・矢崎・大熊氏等の城跡は現在それぞれ確認されており、上原氏はその館跡も確認されている。

昭和56年11月、長野県中世城館跡分布調査委員牛山皓司氏（現清陵高校教諭）の案内で、茅野市文化財保護調査のため、尖石考古館長宮坂虎次氏と矢崎孟伯（当時茅野市文化財審議委員）の3名が通称古田城跡の実施調査を行なった。古田城跡は上川を眼下にそのすぐ西側にある鬼場城跡と並んで北方大門峠方面に対する重要な拠点に位置しておることから、この時の調査も館あるいは邸跡、土塁・空堀跡等の有無を調べた。しかし、館跡・土塁跡は発見できず、わずかに東北側広場上に空堀跡に類するかと思われる箇所があったが、調査の結論はこの空堀跡に類するものは、後世作られた道筋と判断した。但し、東北側緩斜面の下部に近い所には古井戸跡かと思われる所（くぼみと水のしめり）1ケ所と、その東側に湧水2ケ所を発見できた。この時の結論としては、城跡かも知れないが、主部跡・館跡ともに不明、狼煙台や見張所等はあったろうが、東北側斜面の広場で邸跡ではなかろうかと推測された場所も表面調査ではその遺構は発見できなかった。

今回、茅野市教育委員会が文化財保護の立場から古田城跡調査団を組織され、私ども調査団員も、発掘場所の現地下調査をした。しかし、この時には既に5年前の井戸跡かと思われた所は地形・樹木等にいささか差異がみられ、その場所は発見できなかった。

今回の発掘調査は茅野市教育委員会の鵜飼幸雄・小林深志両氏を中心に、地元下古田区老人クラブの方々のご協力により既述のように綿密な計画のもとに行なわれた。城館跡などの遺構に該当するものは発見できなかったが、縄文時代の「陥し穴」（土坑）やその柱痕と考えられる遺構の確認もできた。今回のトレンチによる調査総面積は1,150㎡でこの地籍の16%にあたるもので、古田城跡の存否を云々することは早計であり、今後の研究に委ねたい。終りに本調査を企画くださった市教育委員会当局ならびに調査に参加協力くださった関係各位に心からお礼申し上げる次第である。

古田城跡
——茅野市立八ケ岳総合博物館用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和62年2月　　発行

編集　長野県茅野市塚原2丁目6番1号
発行　茅野市教育委員会
印刷　長野市中越293柴崎第1ビル
ほおずき書籍株式会社